

## はしがき

第二次世界大戦という史上最大の戦争が、史上最悪といつてよい惨禍を世界に撒き散らしてからまもなく、人類は、アメリカとソ連という二つの超大国および、それぞれの率いる陣営間の「冷戦」という、また別種の対立と恐怖のもとで日々を過ごすことになった。この対立と恐怖は四〇年以上にわたって続いたが、その間も、世界は様々な変容を経験した。

二〇世紀初めに頂点に達したヨーロッパ帝国主義による植民地支配は、第二次世界大戦後、急速に瓦解してゆき、アジア、アフリカを中心に多数の新興国民国家が世界地図を埋め尽くしていった。第二次世界大戦での大量破壊を可能にした軍事技術は一層の発展を遂げ、冷戦を繰り広げる東西陣営間の軍拡競争は、核兵器とその運搬手段の発展により、人類全体の滅亡の可能性さえ想起させるまでに至った。その一方で世界の少なくとも一部は未曾有の経済発展を遂げ、溢れかえるまでに豊富な消費財と高度な技術的利便性に支えられた消費社会の繁栄を謳歌した。人々が抱く価値観の変容もまた急激なものがあり、新しい価値観と古い価値観の衝突、若い世代とより年上の世代の間の軋轢が各地で様々な形で展開された。

本書は、冷戦という出来事がどこから生まれ、いかなる変化を経て、どのように終焉していったのかという過程を、一貫した視点から描くことを第一の目的とする通史である。それと同時に本書は、冷戦時代に生じた人類規模の様々な変容と冷戦そのものの変容の繋がりを明らかにすることも目指した書物である。そのような方法で二〇世紀後半の世界の成り立ちを理解することが、いま我々が暮らす二一世紀前半の世界の成り立ちを理解するうえで不可欠の営みであることは言うまでもないだろう。

もちろん、本書はこうした意図のもとに書かれる初めての書物ではない。本書の各所でも言及しているように、先ずする冷戦史を含む歴史研究の様々な成果のうえに成り立つものである。しかし広く一般的な日本の読者を想定し、比較的アクセスしやすい形でありながら、同時に冷戦前史からポスト冷戦時代までをカバーしつつ、関連する世界的変化を踏まえて冷戦の全体像を一定の細さで描き出す書物としては、これまでにない存在意義を持つと自負するものである。

編者二名を含め、総勢一三名からなる本書の執筆陣はこれまで、それぞれ異なる地域の政治や外交、社会や文化に関わる出来事を関心対象としてきた。しかしいずれも、おおむね二〇世紀の後半、冷戦対立がまさに国際関係を支配する大きな前提条件として君臨した時代を対象として、最新の一次史料に基づく実証的な国際史・政治史・外交史の研究に取り組んできたという点では共通する。この執筆陣は、これまでも冷戦史の特定の時期や側面に注目した共同研究の成果を複数の学術書として公開しており、現在もなお冷戦をテーマとする共同研究を遂行している。執筆陣はまた、いずれも日本の大学で教鞭をとる立場にあり、これまでの研究成果を踏まえて冷戦史を通史として講じるうえで適切な参考書となる、手にとりやすい書籍の必要性も痛感してきた。その結果、内外の最新の冷戦史研究の成果に依拠しつつ、これまでの各自の研究成果を踏まえたうえで刊行したのが本書である。

本書刊行に向けた議論を開始したのは二〇一九年中のことであったが、全体の構成と各執筆者の分担内容といった実質的な議論を本格的に開始したのは、二〇二〇年二月のことである。すでに新型コロナウイルスによる感染症の拡大は日本国内にも及び始めていたが、京都で開催した対面での研究会において、各自の執筆構想案について最初の検討作業を行ったことを記憶している。結果的にはこれが、本書刊行以前では最後の対面での研究会になり、以後、オンラインでの打ち合わせを重ねつつ、本書の構成を煮詰め、各自の原稿を検討し合った。

具体的な企画の確定から最終的な原稿が出揃うまでに三年数カ月、刊行までに四年という月日を要したのは、ひとえに編者の力不足の表れであるが、コロナ禍による社会の混乱は研究・教育・執筆活動にも大きな影響をもたらし、それへの対応に追われた結果でもある。とはいえ、その間にも本書執筆陣は本書と同じく法律文化社から、一九七〇

年代後半から八〇年代初めにかけての冷戦終焉に向けた国際秩序の急激な変容の始まりを分析した、益田実・齋藤嘉臣・三宅康之編著『デタントから新冷戦へ——グローバル化する世界と揺らぐ国際秩序』を、共同研究の成果として二〇二二年四月に刊行している。本書よりは学術書的性格の強い書籍であるが、本書と併せ読んでいただくことで冷戦史への理解を深めていただけるものと考ええる。

本書のタイトルは様々に悩んだ挙げ句、『冷戦史——超大国米ソの出現からソ連崩壊まで』という、現在のものになった。序章から終章までの本書全体の議論は、冷戦の前史に始まり、冷戦後の世界についての記述も相当程度まで含むものである。しかし本書は何よりもまず、通史としての『冷戦史』を書くことを意識して書かれたものであることには間違いない。単刀直入にそれをタイトルとした次第である。日本語でも英語でも冷戦史の全貌を提示する野心的な著作はすでにくつか存在し、編者や執筆者の一部もそうした著作の執筆や翻訳に携わってきた。それらの中には、分量の上では本書よりもはるかに浩瀚なものもある。いかなる歴史書であれ、「通史」を名のるのであれば、相應のボリュームを用意してまんべんなく目配りをするのが期待されるのかもしれない。執筆する側としても他を圧倒するような物量を投じて、決定版的な通史を上梓する野心がないわけではない。しかし、本書はあえて入手可能性・通読可能性という視点を意識し、相対的にはコンパクトながら、必要にして十分な情報量を盛り込んだものになったと自負している。もちろん、本書に優る冷戦史の通史が日本語で著される日はいずれ訪れるであろうし、研究者としての執筆陣はそれを心より期待するものである。それまでの間は、本書が広く日本の読者にとって、冷戦という過去二〇〇年の近現代史の中でも飛び抜けて重要な出来事について、その起源と変容と終焉を辿り、それらをより広い歴史的文脈に位置づける助けとなるのを、執筆者一同は期待している。また本書で扱った事項に関わる「冷戦史年表」を法律文化社ウェブサイトに掲載したので、あわせて参照されたい（次頁参照）。なお、年表記載事項の確認・点検にあたっては、京都大学大学院の森江建斗氏にご協力をいただいた。編者を代表してお礼を申し上げたい。もちろん本文中および年表中の記載について、最終的な誤りは編者の責に帰するものである。

広く人文社会系書籍一般に言えることではあるが、現代史・外交史・国際史分野での書籍出版をめぐる情勢もまた、

厳しさを増すばかりである。そのような中で本書刊行に向けてご尽力いただいた法律文化社編集部の方には、改めてお礼を申し上げます。

二〇一三年九月

編者を代表して 益田 実

〔Web資料〕

法律文化社ウェブサイト（本書紹介ページまたは「教科書関連情報」に「冷戦史年表」を掲載している）

URL : <https://www.hou-bun.com/01main/ISBN978-4-589-04324-5/document01.pdf>

